

# 歴史

# 探訪

「うつくしま」への系譜



今年、生誕百年を迎える「カエルの詩人」草野心平（1903～1988）。いわき市小川町に生まれた心平が、隣村の川内村と関わり、村に「天山文庫」が建設されると、この地は、心平にとってかけがえのない場所となっていくきました。そしてその背景には、心平と村の人々の「真の心のつながり」がありました。ここでは、心平が村を訪れてから晩年まで、村役場職員として心平と関わってきた秋元卓三さんにお話を伺いながら、心平と天山文庫が生んだ真の交流に想いを馳せてみました。

## 心平を引き寄せた歓待と沼の魅力

心平が川内村と関わりをもったのは、彼が書いた一篇の新聞随想がきっかけでした。昭和24年（1949）、心平は、読売新聞「福島県版」に、自ら命名した郷里の「背戸峨廊」の溪谷美を紹介しながら、川内村に生息するモリアオガエルについて、次のように触れました。「今年はその、木の枝に卵を生み、そこでおたまじゃくしにまで育って沼に落ちる珍しい記念物を是非みたい」。これを読んだ川内村・長福寺の住職矢内俊晃は、心平に早速、モリアオガエ

川内村を愛したカエルの詩人

# 草野心平と 天山文庫の真の交流



草野心平 いわき市小川町生まれの昭和の詩人。1987年に本県出身者では4人目となる文化勲章を受けた。「カエルの詩人」として知られる。写真は、天山祭りで村民と酒を酌み交わす心平（中央）



平伏沼・モリアオガエルの卵塊。毎年6月が産卵のシーズンです



昭和28年の初来村時平伏沼入り口にて後列中央が心平。前列中央は矢内俊晃和尚

ル生息の地・平伏沼への招待状を書いたのです。その年に、心平の望みは果たされませんでした。矢内和尚が招待状を送り続けて5年目の昭和28年8月29日、心平は初めて来村しました」と秋元さんは話します。産卵時期の6月は過ぎていましたが、数年来、招待し続けてくれた矢内和尚の好意に心えたいという想いが、心平を川内村へと向かわせました。彼は長福寺に一泊して、翌日には沼に行く心づもりでしたが、「現・前・元村長をはじめ、村全体の歓迎の酒に浸り、雨が降り続いていくこともあって、心平さんが沼へ行ったのは四日目のことでした」と、秋元さんは振り返ります。たちこめる霧の中、水櫃を主とした原生林に囲まれた幽邃な沼のたたずまいに強く引き寄せられた心平は、以後毎年川内村を訪れるようになり、村との交流が年々深まってきました。そんな中、人々から心平を名誉村民にしようという声があります。しかしこれには、村議会議員の一部が賛成していませんでした。当時の心平は、新聞社の文学賞を受賞していたものの、まだ詩人として今日ほどの評価を得ておらず、無理もない話でした。しかし心平と心から接していた村長や矢内和尚たちは、反対した議員の一軒を説得して歩き、ついに名誉村民の議決を得たのです。



天山文庫 昭和41年、村民からの寄付や労働奉仕、そして村の出資によって完成。ここは心平にとってかけがえのない場所でした

交流、出会い、融合を夢見た天山文庫

「当時の村の先輩方の、心平さんに対する熱い想いと行動は、本当に素晴らしかった」と秋元さんは振り返ります。昭和35年(1960)9月、名譽村民の推戴式が行われました。その主な理由は、心平ゆかりの文化人が次々と村を訪れ、村民との交流が深まったことや、心平作詞の川内中・川内一小・三小の校歌が生まれ、平伏沼に心平の歌碑が建立されたこと、そして新聞や雑誌、テレビなどを通じて、心平が川内村の姿と美しさを広く伝えたことでした。その褒賞として、村では特産の木炭百俵を毎年送ることを決め、川内村からトラックで、当時カタガタ道だった国道6号を夜通し走り、東京都新宿区柏木町の心平の借家に届けました。心平はこれを、「ユーモラス」と喜びましたが、あまりの多さにそのほとんどを友人の病院に寄贈し、木炭百俵は以後辞退しました。そしてカラになったトラックに返礼として、蔵書3000冊をつけて寄贈しました。その蔵書は一時、長福寺に置かれていましたが、本を保管し、心平さんにくつろいでもらえる場所をつくる」と矢内和尚が村役場にかけあつたことが、「天山文庫」が生まれるきっかけとなったのです。

天山文庫の建設は、村民の地主からの土地の無償提供や、村民からの一木一草に及ぶ提供と労働奉仕によってなされました。そして昭和41年(1966)7月16日、天山文庫の落成式が行われ、あわせて第一回天山祭りが催されました。ちなみに心平が名付けた「天山」とは、東洋と西洋文明交流の道となったシルクロードにそびえる天山山脈になぞらえたもの。文庫を通じた、みちのくと中央の文化の交流、人と人との出会いと融合の願いが込められたものでした。天山文庫には心平を慕う多くの人



天山祭り 天山文庫の庭で毎年7月16日を中心に行われます。心平亡き今も開催されています



天山文庫の庭づくりの親方となって働く心平(中央)と村民たち(右端が秋元さん)



「これは最初の天山祭りの時に、みんなが酒に酔いながら書いた寄せ書きです。ほとんど真っ黒で読めませんが、心平さんはこれが大好きで、囲炉裏のある部屋に飾っていました」と語る秋元さん



奥には心平の机、手前には囲炉裏。ここは心平にとって、日々詩想を練る場であるとともに、客人を温かくもてなし、語り合う場でもありました



平伏沼畔に建つ心平の歌碑(昭和31年建立)



今年度、天山文庫を拠点とした学習塾が開講。他にも、村民を対象とした文学賞に毎年多くの作品が寄せられるなど、心平を想い、ふるさと川内村を想う心は今もなお受け継がれています

が訪れ、村の人々は心平亡き後も天山祭りを催し続けました。心平の願いは、今日に至るまで永く受け継がれることとなったのです。

世紀を超えて、真の交流を

天山文庫とは、いわば書庫つきの心平の住まいでした。文庫が完成してから、心平は毎年ここを訪れ、夏を中心に長期滞在するようにになります。彼は毎朝5時過ぎには起きて、辺りを散歩し、7時頃には食事をします。そんな規則正しい生活を送っていました。秋元さんは、「心平さんが庭の池の鯉に近づいていくと、鯉は逃げもせず寄ってきて、指にくいついてきたもの

です。あれは不思議でした。また庭にあるへびの抜け殻を見つけては、『おお、お前はずいぶん大きく育ったなあ』などと語りかけていました」と振り返ります。そんな日々のエピソードの一つひとつに、心平が万物に注いだ等しい眼差しと、村の人々に広く親しまれた人間性がかいま見ることができそうです。

天山文庫は、心平にとって、都会の不規則な生活から自分を取り戻し、心を再生する「元気の源」でした。川内村での暮らしの中で、人々のやさしさと親切に触れ、心平は真のやさしさと充実した生活感を得たのです。昭和63年(1988)、心平は東京の病院に入院していましたが、「天山へ行きたい」という強い希望で、病

院から直接天山文庫へと向かいました。秋元さんは当時をこう振り返ります。「帰京する直前、寝室のベットで、心平さんは私の手を強く握りました。『帰りたいくないのですか?』と問うと、強く訴えるようにうなずいた。あの表情を忘れることはできません」。心平にとって、川内村、そして天山文庫こそが「真に帰る場所」であったのかもしれない。心平は帰京して半月後に死去しました。

天山文庫と草野心平は、くぐんだ真の交流。その温かなぬくもりと強い絆は、決して忘れてはならないものとして、心平が生きた世紀を超えて、今もなお人々の心に刻まれ続けています。